

## 鎌木英子氏寄贈の縄文土器

### —岡山理科大学博物館学芸員課程所蔵コレクションについて—

徳澤啓一・山田美和\*・小林博昭

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

\* 特定非営利活動法人歴史・環境・まちづくり

(2005年9月30日受付、2005年11月15日受理)

#### 1 今回の寄贈資料について

2004年7月3日、鎌木英子氏(岡山市在住)から故鎌木義昌氏が採集・発掘したコレクションの一部の寄贈を受けた。寄贈資料の内容は、旧石器時代から古墳時代にかけての考古資料であり、1) 岡山県・香川県で発掘された資料、2) 青森県から鹿児島県の各地で表面採集等の手段で収集された資料からなる。

本稿では、今回の寄贈資料のうち、2)の関東地方の各地で収集された縄文土器のコレクションについて(以下「本資料」という)、取り上げることにしたい。

##### (1) 採集者

本資料は、生前、鎌木義昌氏が所蔵していたのだが、採集者本人であったのかは定かでない。しかしながら、後述する添え書き等から推し量れば、本資料の収集行動の主体であったことを肯定的に推測できる。さらに、写真1を見ると、「関東中期縄文式土器」の大書の脇には「岡山県(県)学生考古学会」との添え書きがある。高橋護氏の記述によれば、「1950(昭和25)年、(鎌木)先生を指導者として高等学校の生徒を集めた岡山県学生考古学会が組織されると(後略)」とあるとおり、当時、岡山県食料営団(のちに食糧公団岡山県支局となる)に勤務していた鎌木氏が率いる若き考古学徒も採集ないしは整理作業にあたったとも考えられる。

##### (2) 採集年月日(時期)

本資料の収納箱を精査すると、箱書きやラベル等から採集年月日、少なくとも、採集時期を推し量ることができる。また、写真1のように、縄文土器の裏面に採集地・採集年月日が施された注記もある。“東京都世田谷赤堤町一丁目 新井遺跡 昭和24.2.19”、“東京都世田谷区千歳船橋町 昭24.2.19”とある。昭和24年前後の鎌木氏の遺跡調査の動向としては、第1表のとおりであり、千歳遺跡及び船橋遺跡での収集行動は、昭和24年1月の竹原貝塚及び黄島貝塚、11月の磯の



写真1 根田貝塚(茨城県霞南市)の受入状態



写真2 船橋遺跡(東京都世田谷区)の受入状態

第1表 鎌木義昌氏略年譜

1948年 (昭和23)	8月11日	黄島貝塚(瀬戸内市(牛窓町))
	8月28日	伊喜末遺跡(香川県)
	11月	大内田貝塚(岡山市)
1949年 (昭和24)	1月15日	竹原貝塚(岡山市)
	1月18日	黄島貝塚(瀬戸内市(牛窓町))
	11月28日	磯の森貝塚(倉敷市)
1950年 (昭和25)		福田古城貝塚(倉敷市)
		船津原貝塚(倉敷市)
		前山遺跡(倉敷市)
		門田貝塚(瀬戸内市(邑久町))
		郡貝塚(岡山市)
		涼松貝塚(倉敷市(船穂町))

森貝塚の発掘調査の合間を縫ってのことと推測できる。また、本資料の一部は、採集年月日が記されていないが、下組貝塚のように、早稲田大学考古学研究室による発掘調査、昭和24年6月の日付と合致する資料もあり、鎌木氏を取り巻く環境と収集時期を擦り合わせても、昭和24年前後が当て嵌まらなくもないようである。

### (3) 採集地

箱書きやラベル、注記の記載は、ほとんどが型式名と地名等の組み合わせで表記されている。この注記に遵って、採集地である遺跡名や地名等を検索したが、昭和24年前後という採集時期からしても、地名地番等も遷移しており、ますます採集地の特定は難しい。本稿では、今日の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合を試みながら、複数の採集地候補を提示しつつ、本資料の由来となった遺跡地を絞り込むことにしたい。

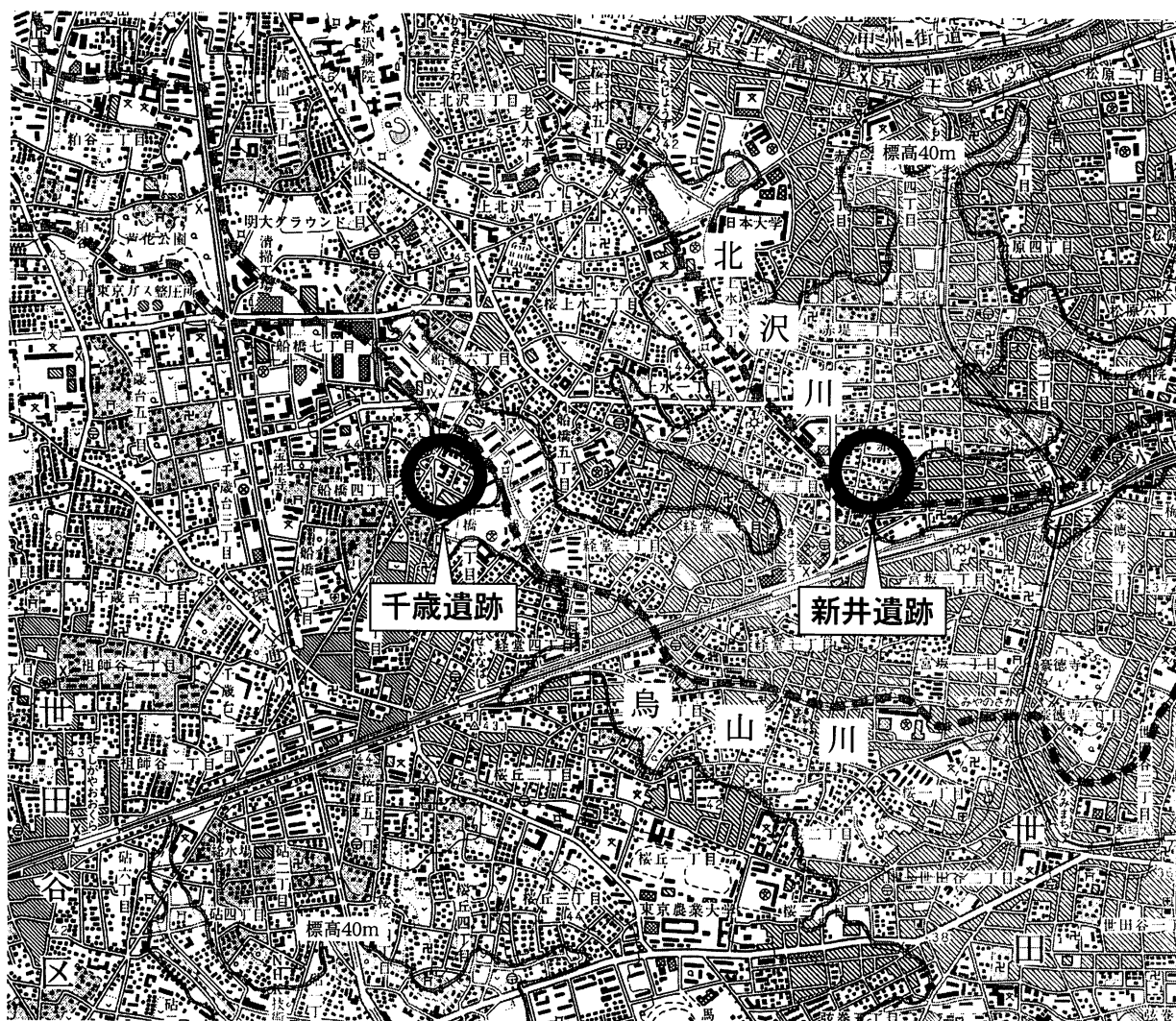
## 2 本資料と採集地（遺跡）の概要

本資料は、関東地方東部（東京都・神奈川県）及び関東地方西部（千葉県・茨城県）の8地点で採集されたようである。内訳としては、縄文土器67点、石鏃2点、打製石斧11点を数える。本資料全体としては、縄文時代早期から晩期にかけての所産である。

本資料は、本来ならば、鎌木氏の当時の足跡を辿りながら、掲載順序としたいところだが、昭和24年頃の採集行動に関する情報が乏しい。本稿では、採集資料の所産時期を順序として、以下、採集地単位での紹介を行うことにする。1) 採集地と思しき表記を手がかりに、周辺における周知の埋蔵文化財包蔵地を照合しながら、採集地候補を提示する。2) 採集資料の観察をもとに、文様・技法等の特徴を取りまとめ、該当する型式及び所産時期等を明らかにしておきたい。



第1図 本資料の採集地（国土地理院 1/500,000 地方図(4)「関東甲信越」抜粋一部改変）



第2図 “新井遺跡”・“千歳遺跡” (国土地理院 1/25,000 地形図「東京西南部」・「溝口」 抜粋一部改変)

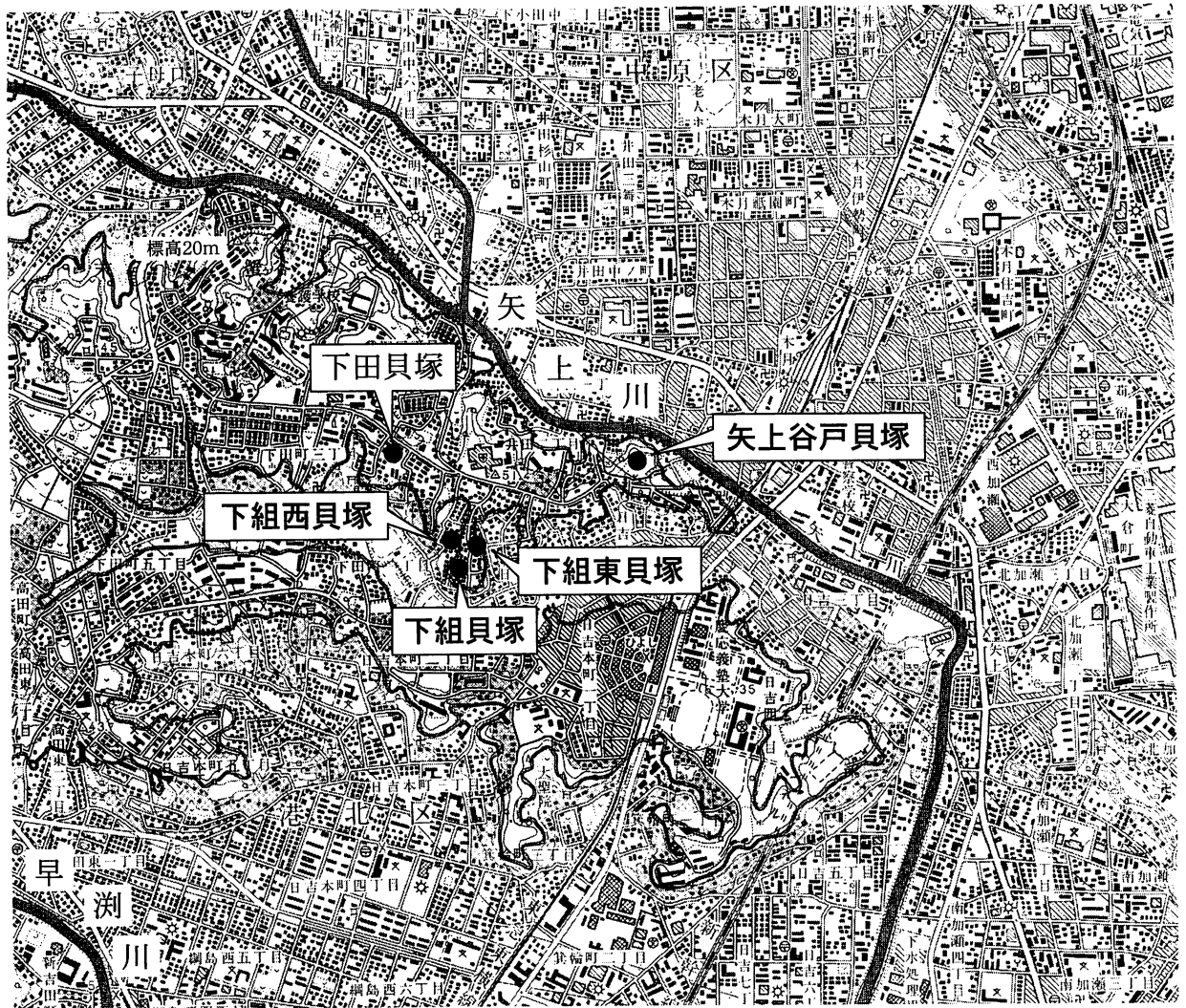
### (1) “新井遺跡” (東京都世田谷区)

採集地 “東京都世田谷区赤堤町一丁目 新井遺跡 昭 24.2.19” の注記がある。現在、東京都世田谷区赤堤一丁目に所在する新井遺跡 (世田谷区Na.62 遺跡) から表面採集されたと推測される。新井遺跡は、目黒川の支流で現在は大部分が暗渠化している、北沢川左岸の標高約 39m の台地上に位置する。1936 年 (昭和 11 年) に、江坂輝彌氏により数点の早期燃糸文系土器が表面採集された。その後、北沢用水の河道変更工事で堀上げられた、灰色粘土層中に燃糸文土器が包含されていることが確認、採集され、同氏による報告がなされている (江坂 1942)。

資料 第 7 図 1 は、早期燃糸文系の土器である。口唇部は丸く肥厚し、口縁部の下から R の燃糸文を縦位に施文している。

### (2) “千歳遺跡” (東京都世田谷区)

採集地 “東京都世田谷区千歳船橋町 昭 24.2.19” の注記がある。“千歳船橋町” 周辺には、東京都世田谷区船橋町三丁目に所在する千歳遺跡 (世田谷区Na.55 遺跡) があり、本遺跡から表面採集された可能性が高い。千歳遺跡は、烏山川右岸の標高約 42 ~ 43m の台地上に位置する。1947 年 (昭和 22 年) に発掘調査が行われ、新井遺跡と同様に、洪積地層であるローム層上部から早期燃糸文系土器が出土することが確認された。新井遺跡とともに、当時、関東地方においてもきわめて事例の少ない燃糸文系土器の出土例であったといえる。資料 第 8 図 2・3 は、早期燃糸文系の土器である。2 は胴部、3 は尖底の底部破片で、R の燃糸文を縦位に施文している。第 8 図 1 は、中期後葉加曾利 E 式の胴部破片である。L の燃糸文を縦位に施文している。



第3図 “下組貝塚（下組西貝塚・下組東貝塚）”・“矢上谷戸貝塚”（国土地理院 1/25,000 地形図「川崎」抜粋一部改変）

### (3) “下組貝塚”（神奈川県横浜市）

採取地 “花積下層 下組” の注記がある。“花積下層” は型式名、“下組” が地名であろう。採取地は、埼玉県南埼玉郡三芳町下組、あるいは神奈川県横浜市港北区下田に所在する下組貝塚に絞り込むことができる。前者の三芳町下組周辺では、藤久保遺跡、俣埜遺跡が見られるが、ともに、旧石器時代の遺跡である。後者の下組貝塚は、多摩丘陵の東端の日吉台地上に立地する。北側は矢上川が流れ、南側は谷戸が形成されている。この谷戸に向かって舌状に突出する斜面に貝塚が集中して検出されている。下組貝塚より北方約 100m に下組東貝塚・下組西貝塚があり、下組西貝塚と同様に花積下層式および菊名式の土器を出土している。下組西貝塚は、昭和 24 年以降に発掘調査が実施されている。

「下組」の採取地については、「矢上」と下組貝塚が

近接していること、下組西貝塚・下組東貝塚では花積下層式の土器が主体を占めることから、神奈川県横浜市港北区下田の下組貝塚と考えられる。

資料 第9図 1～3 は、前期初頭花積下層式である。1・2 は繊維土器である。1 は横位の隆帯を添付し、隆帯上に刻みを施している。2 は口縁部で隆帯様に肥厚し、無節の羽状縄文を施文している。3 は無節の羽状縄文を施している。

### (4) “矢上谷戸貝塚”（神奈川県横浜市）

採取地 “諸磯式（矢上）” の注記がある。“諸磯式” は型式名であるが、“矢上” も “型式名” ないしは “地名” であると推測できる。“矢上” が型式名である場合、諸磯 a 式前後に相当する当時の矢上式と記されているのであろう。“矢上” が地名とすると、神奈川県横浜市港北区矢上もしくは幸区矢上に絞り込むことができるだ



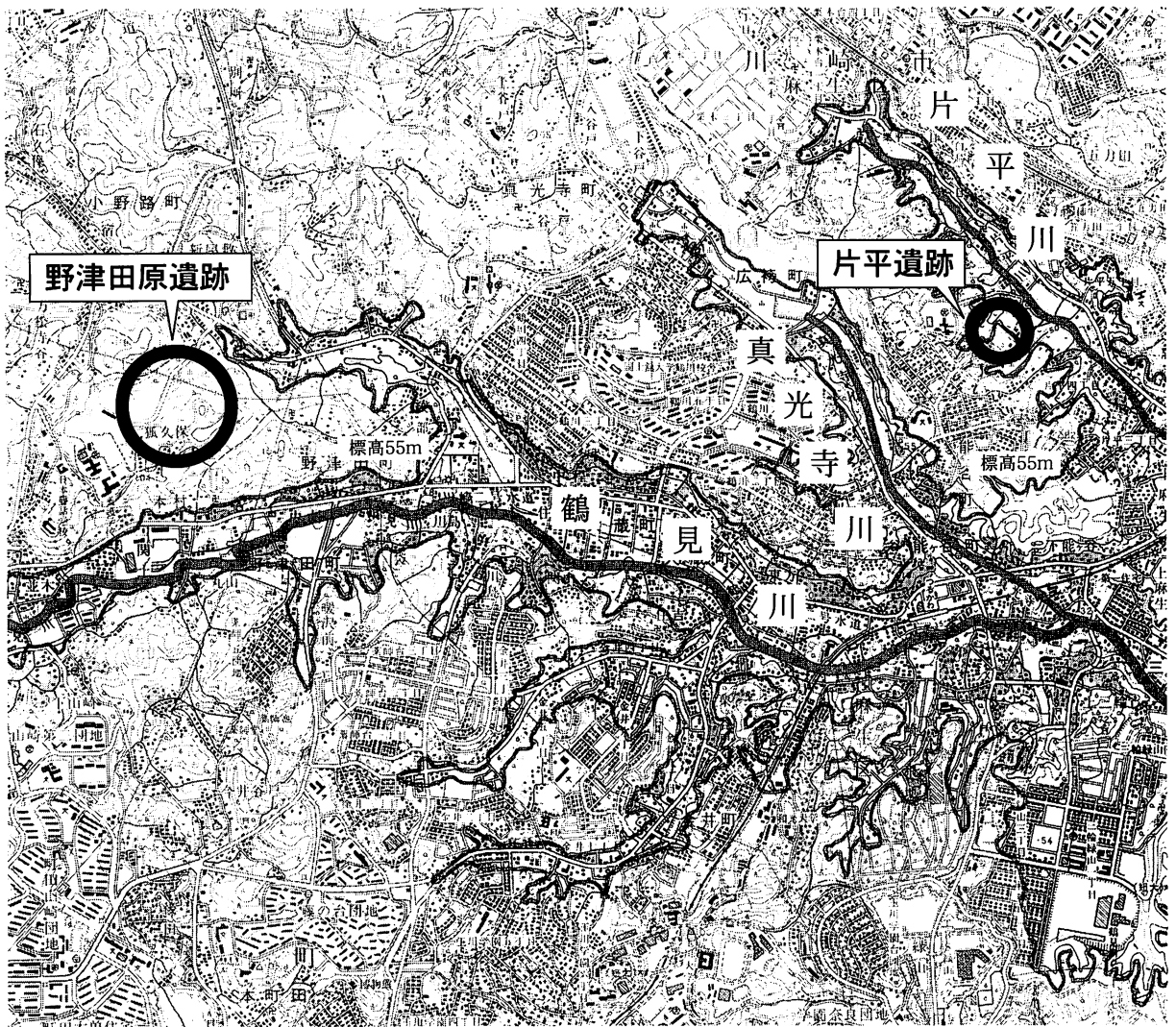
第4図 “根田貝塚” (国土地理院 1/25,000 地形図「土浦」 抜粋一部改変)

ろう。また、この中を流れる矢上川流域には、日吉台に位置する縄文時代前期の矢上谷戸貝塚を指すと推測される。しかし、本資料の表記からすると、当時、諸磯式前半とされた矢上式を示すと考えるべきであろう。資料 第10図1・3～6は、前期後半の諸磯a式である。1は口縁部で、単節RL縄文を施文した後半半載竹管の腹による平行沈線に連続刺突を施している。沈線下には竹管の先端による円形刺突を縦位に施す。3は口縁部、4は胴部上半の破片で、櫛歯状工具による横位の条線を施文し、条線間に波状の条線を施している。竹管の先端による円形刺突を縦位に施す。5は撚糸文Lを横位に施文した後、半載竹管の腹による平行沈線に連続刺突を施して区画し、区画内を磨り消している。6はLRの単節縄文を施した後、半載竹管の腹による連続刺突で区画し、区画内を磨り消している。第10図2は、諸磯a～b式で、口縁に沿った平行沈

線に半載竹管の腹による連続刺突を施し、沈線下に同工具の腹による平行沈線を横位に施している。第10図7は、諸磯b式で、RLの単節縄文を斜位に施文した後、横位に添付した浮線文上に方向を交互に違った細いキザミを施している。

#### (5) “根田貝塚” (茨城県霞南市 (阿見町))

採取地 “茨城県 (県) 高来根田” の註記がある。茨城県稲敷郡阿見町竹来 (たかく) という地名が見られ、注記の「高来」と考えられる。採取地は竹来に所在する根田貝塚と考えられる。根田貝塚は、常総台地の一部をなす筑波・稲敷台地北東部の標高約25mに位置する。北側は霞ヶ浦に面し、南西は清明川により開析されている。また、北西1.1kmに廻戸貝塚、東方500mに見目貝塚、南方500mには入屋敷貝塚が確認されている。1926年 (昭和元年) に、大野一郎氏により



第5図 “片平貝塚”・“野津田原遺跡” (国土地理院 1/25,000 地形図「武蔵府中」・「原町田」 抜粋一部改変)

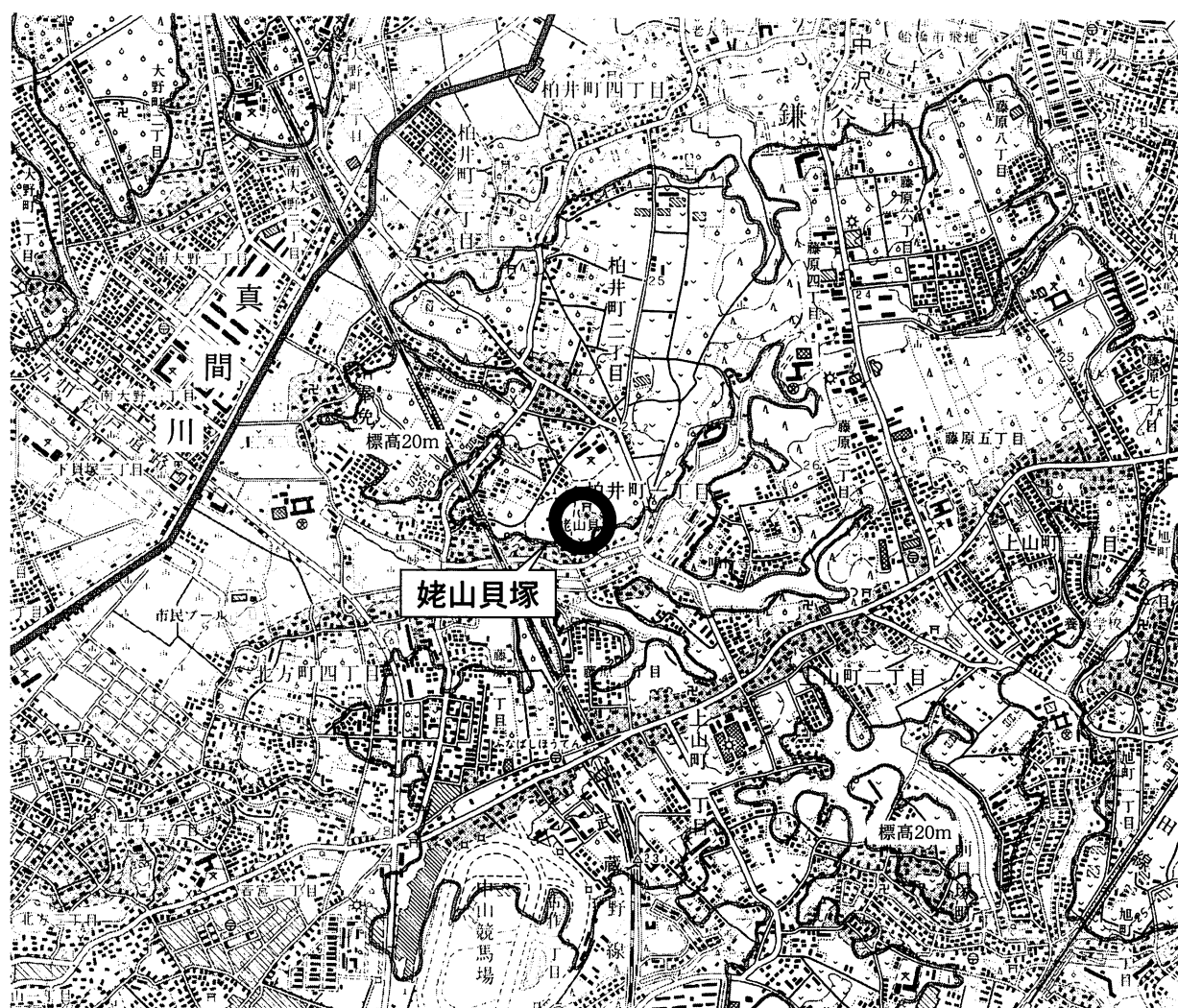
遺物発見地名表に報告がなされている (大野 1926)。1937 年 (昭和 12 年) には史前学研究所により発掘調査の報告がなされた (大山ほか 1937)。中期阿玉台式土器を主体とする貝塚である。

資料 第 11 図 1 は、中期前葉阿玉台 I 式で、口縁部は隆帯で楕円形区画し、垂下する隆帯を添付後、隆帯脇に半截竹管の押し引きによる角押文を施している。胴部は輪積痕を残したままである。第 11 図 2 は、阿玉台 I b 式で、口縁には板把手が付く。口縁部は断面三角形の隆帯で横位に区画し、区画内に半截竹管の押し引きによる角押文列を斜位に充填している。また口唇部および把手の先端には刻みを施している。胴部は輪積痕を残したままである。第 11 図 3 は、阿玉台 I b ~ II 式で口縁部は隆帯で区画し、縦位の区画は迫り出し突起状を呈する。隆帯上には刻み、隆帯脇には半截竹管の押し引きによる角押文を施し、区画内に同文を

充填している。第 12 図 4 は中期阿玉台 II 式で、口縁は扇状把手から口縁部区画の隆帯へつながり、隆帯上には刻み、隆帯脇には半截竹管の押し引きによる角押文を施している。第 12 図 5 ~ 7 は、阿玉台 III 式である。5・7 は、口縁部を隆帯で楕円形区画し、隆帯脇に半截竹管の押し引きによる角押文を施す。さらに 5 は区画内に角押文列を充填、口唇部に刻みを施している。6 は口縁部を断面三角形の隆帯で区画し、隆帯脇に細い三角押文を施している。区画内には波状の沈線、口唇部に刻みを施している。

#### (6) “片平遺跡” (神奈川県川崎市麻生区)

採集地 “神奈川県川崎市舊柿生村片平京保台” の注記がある。地名から川崎市麻生区片平に所在する片平遺跡と考えられる。片平遺跡は、多摩丘陵を東流する鶴見川の支流である片平川と真光寺川に挟まれた、標高



第6図 “姥山貝塚” (国土地理院 1/25,000 地形図「船橋」 抜粋一部改変)

約 55m の舌状台地に位置する縄文中期の遺跡である。資料 第 13 図 4・5 は、中期前葉阿玉台Ⅱ式の口縁部である。4 は隆帯による楕円形区画を添付した後、隆帯脇に半截竹管状の工具による連続刺突を施し、区画内に同工具による連続刺突を充填している。5 も同様に隆帯による楕円形区画をした後、隆帯脇に細い連続刺突を施し、区画内に三角押文列を充填している。隆帯上には刻みを施している。第 13 図 1～3 は、阿玉台式Ⅱ～Ⅲ式の口縁部である。1 は口縁部に隆帯で楕円形区画をした後、隆帯脇に半截竹管による押し引きを施している。2 は口縁に沿って幅広の角押文列を施し、その下に半截竹管の押し引きによる角押文を施している。3 は波状の沈線で口縁部を区画し、区画内に沈線を充填している。裏面には半截竹管の先端による押し引きを施している。

写真図版 2 の 6～16 は、打製石斧である。6 は、ホ

ルンフェルス製で裏面の大部分に原礫面を残す。主に右側縁に調整が加えられている。7～9 は、砂岩製で裏面に大きく原礫面を残す。8 は右側縁に細かい調整が加えられ内湾する。10・11 は、ホルンフェルス製である。12 は、砂岩製で表裏の一部に原礫面を残す。上半部を欠損しており、本来はかなり大型のものと思われる。13 は、砂岩製である。14 は、凝灰岩製である。15 は、砂岩製で、裏面の一部に原礫面を残す。右側縁に細かい調整が加えられている。16 は、裏面に大きく原礫面を残し、右側縁に細かい調整が加えられている。

#### (7) “野津田原遺跡” (東京都町田市)

採集地 “東京都南多摩郡鶴川村野津田原” の注記がある。東京都町田市野津田町に所在する野津田遺跡から表面採集されたと推測される。多摩丘陵を流れる鶴見川の左岸で、北側に谷戸が入り込んだ台地上に位置す

る。後期前半の掘ノ内式・加曾利B式の住居跡や墓壇や、少量ではあるが晩期の土器も出土している。江坂輝彌氏によれば、1930年代より周知されており、地元の研究者などが表採に訪れていたとある。自身も1935年から1942年頃にかけて、野津田原遺跡を含む町田市、川崎市麻生区、多摩市、八王子市などの多摩丘陵地域の遺跡探索に向き表採などをおこなっている。近年では、野津田上の原遺跡調査会によって発掘調査の報告がなされている。

資料 第15図1は、中期前葉阿玉台式Ⅲ～Ⅳ式の口縁部である。横位の微隆起帯を添付し、隆帯の上下に平行するV字状の刺突文を施している。第15図2・3は、後期安行1～2式の口縁部である。RLの単節縄文を斜位に施文した後、隆帯や磨消・沈線により帯縄文を構成し、口縁より垂下する縦長の突起を添付している。第15図4は、晩期大洞BC式の口縁部である。写真図版3の5は、チャート製の有茎石鏃である。写真図版3の6は、頁製製の石鏃で基部が破損している。

#### (8) “姥山貝塚” (千葉県市川市)

採集地 “千葉県姥山”の注記がある。千葉県山武郡横芝町姥山、あるいは千葉県市川市柏井町に所在する姥山貝塚が該当するが、本資料は姥山貝塚のものとして推測される。姥山遺跡は、真間川左岸の柏井台を南北に分断するように入り込んだ小支谷に面する、標高約20mの台地上に位置する。東西約130m、南北120m、面積13,000㎡もの馬蹄形(C字形)貝塚である。調査は明治26年以降何度も行われ、大正15年に東京人類学会が行った発掘遠足会で、人骨や遺物とともに初めて竪穴住居跡の全容が平面的にとらえられた学史に残る遺跡である。その後の発掘で阿玉台式、加曾利E1式、堀之内1式、加曾利B1式などの土器や、共同墓地と思われる場所からは数多くの人骨とともに、装身具や特殊器形の土器などが発見されている。

資料 第14図1～9は後期後葉安行1～2式である。1はRLの単節縄文を斜位に施文した後、隆帯間に沈線と磨消を施して帯縄文を構成し、口縁より垂下する縦長の突起を添付している。2は口縁に平行する沈線で区画をし、RLの単節縄文を斜位に施文している。3は内面にLRの単節縄文を施文し、太くしっかりした沈線を平行して施している。4、5は沈線上あるいは沈線脇に連続する刺突を施している。7～9は条線を施文するものである。7は口縁部の微隆起に押文を施している。8は地文にLRの単節縄文を施文し、上から条線を施している。

#### (9) その他 (採集地不明)

資料 第16図1～8は、前期中葉黒浜式である。3・5・7は、繊維土器である。1・4～8は、非常に粗い付加条の縄文を施文しており、このうち5・6は羽状縄文である。3は平行沈線を横位、縦位に施している。4はLRの単節縄文を施文し、口縁に沿って波状の平行沈線を施している。第16図9～13は、前期後葉諸磯a式である。9はLの撚糸文を施文し、平行沈線による入組木葉文を施している。10は口唇部よりRLの単節縄文を施文している。11・12は、半截竹管状工具による平行沈線を施すもので、11は肋骨文を施文している。13はRLの単節縄文、第16図14は、Lの撚糸文を施文している。第16図15は、諸磯b式で、斜位の沈線を施している。第16図16・17は、中期後葉加曾利E3式である。16はRLの単節縄文、17はLRの撚糸文を施文した後沈線で縦位区画し、区画内を磨消している。第16図18は、中期で、RLの単節縄文を施文している。第16図19・20は、後期後葉安行1式である。19はLRの単節縄文を施文した後、横位の沈線区画と磨消を施して帯縄文を構成し、口縁より垂下する縦長の突起を添付している。20は斜位の条線を施文した後、横位の沈線を施している。第16図21は、後期後葉安行2式である。隆帯で楕円形区画し、隆帯上にLRの単節縄文を施文している。第16図22は、晩期前葉安行3a～b式である。沈線で区画した後、LRの単節縄文を施文している。第16図23・24は、晩期前葉安行3c式である。2本の並列する沈線で文様を区画するもので、23は沈線間に列点文を施している。24は口縁部にキザミを施し、口唇部に突起を添付している。第16図25～28は、時期不明である。25・27・28は、RLの単節縄文、26はLの無節縄文を施文している。

### 3 本資料の採集行動と学史的背景

本資料は、昭和24年前後の時期において、関東地方の各地から表面採集されたと考えられる。しかしながら、それぞれの詳細な来歴については、残置されている記録がきわめて限定的であるため、些か不明といわざるを得ない。また、採集地は、今日の地名やそれぞれの採集地における発掘調査の経緯を精査することによって、少なくとも、採集地候補を絞り込むことができたといえる。しかしながら、今後の調査如何では、本稿における採集地等の推測も更新される可能性のあることも付記しておきたい。

昭和24年前後とは、第二次世界大戦後の間もない



時期である。こうした苦しい時代の中で、鎌木義昌氏は、備讃瀬戸内地域を中心とする中四国地方の考古学的研究を牽引された。その学史と時代背景に伴う同氏の労苦は、推測するに余りある。

鎌木氏は、昭和24年前後の時期をして、「岡山県における縄文土器の編年研究の概要は、1948（昭和23）、1949（昭和24）年ごろまでに、ほぼその傾向は把握されたが（後略）」（鎌木1991）と振り返られるとおり、いくつかの問題を積み残しながらも、同地域における縄文土器編年の枠組みが提示された時期と見て差し支えなからう。本資料の採集行動は、第1表のとおり、折しも、同地域の縄文土器編年を確立するために、発掘調査が繰り返されていた時期でもある。

しかしながら、こうした多忙なスケジュールの合間を縫いながら、関東地方における本資料の採集行動があったのだろう。鎌木氏は、備讃瀬戸内地方の縄文時代とその文化を追求されるなかで、同地域における研究に止まらず、広く列島内における並行関係を横目で睨んでいたからにはほかならない。当時、縄文時代研究の進歩的地域であった関東地方の動静を睨みつつ、また、その成果を先取りしながら、同地域の研究を進めようとした研究姿勢によるものと考えられよう。

本稿では、些か強推のきらいもあるが、本資料の来歴を明らかにした。そして、これらの観察をとおして、文様・技法等の特徴や比定すべき型式名を提示した。未だ、これらの採集行動の背後にある学史を詳らかにできないが、今後、寄贈資料の残部の報告とあわせて、学史的事情も再度掘り下げてみたいと思う。

## 謝辞

鎌木英子様には、本資料をご寄贈下さいましたこと、厚くお礼申し上げます。本稿の作成にあたっては、高橋護氏、宇佐美哲也氏（泊江市教育委員会）、富樫雅彦氏（新宿区教育委員会）からご指導・ご教示をいただきますとともに、資料等の提供を受けました。以上、記して、厚く御礼申し上げます次第です。

## 参考文献

- 鎌木義昌・木村幹夫 1956 「各地の縄文式土器 中国」『日本考古学講座』3 河出書房  
岡山県史編纂委員会編 1986 『岡山県史』第18巻（考古資料）岡山県  
鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会編 1988 「鎌木義昌先生略年譜」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』岡山県史編纂委員会編 1991 『岡山県史』第2巻（原始・古代1）岡山県  
鎌木義昌 1996 『瀬戸内考古学研究』河出書房新社

## 引用文献

### (1) 新井遺跡

江坂輝彌 1942 「稻荷台系文化の研究～東京市赤堤町新井遺跡調査報告～」『古代文化』第13巻第8号 財団法人古代学協会

桜井清彦ほか編 1975 「1 新井遺跡」『世田谷区資料第8集考古編』東京都世田谷区

### (2) 千歳遺跡

野口義麿 1951 「東京都世田谷区千歳遺跡調査報告」『上代文化』第21輯

野口義麿 1954 「東京都世田谷区千歳遺跡発見の土偶」『考古学雑誌』第40巻第2号 日本考古学会

桜井清彦ほか編 1975 「2 千歳遺跡」『世田谷区資料第8集考古編』東京都世田谷区

### (3) 下組遺跡

西村正衛・中澤保 1954 「神奈川県横浜市港北区下田下組西貝塚」『古代』第1号 早稲田大学考古学会

### (4) 矢上谷戸貝塚

江坂輝彌 1951 「縄文式文化について(9)」『歴史評論』第31号 民主主義科学者評議会

### (5) 根田貝塚

大野一郎 1926 「下總常陸國石器時代遺蹟地名表」『考古学雑誌』第16巻第3号 日本考古学会

大山柏・池上啓介・大給尹 1937 「茨城県稲敷郡舟島村竹来根田貝塚群調査報告」『史前学雑誌』第9巻第4号 史前学会

阿見町史編さん委員会編 1983 『阿見町史』阿見町

### (6) 片平遺跡

1889（明治22）年、片平村が柿生村に編入され、柿生村片平となり、また、1939（昭和14）年、柿生村が川崎市に編入され、川崎市片平として地名が遺されることになった。柿生という地名は、小田急電鉄小田急線柿生駅としてその名前が残っている。

川崎市教育委員会社会教育部社会教育課文化係編 1972

『川崎市文化財調査集録 第7集』川崎市

岩崎卓也・笠野毅・甲元真之編 1971 『仲町遺跡～川崎市片平所在縄文時代遺跡の調査～』仲町遺跡発掘調査団

川崎市市史編纂委員会編 1993 『川崎市史』通史編1 川崎市

### (7) 野津田上の原原遺跡

江坂輝彌 1999 「縄文時代の町田」『発掘された町田の遺跡—木曾森野・野津田上の原遺跡—』町田市立博物館

木曾森野地区遺跡調査会編 1989 『東京都町田市木曾森野遺跡I』

野津田上の原遺跡調査会編 1997 『東京都町田市野津田上の原遺跡』

### (8) 姥山貝塚

市川市史編纂委員会編 1971 『市川市史』第1巻 市川市

\* なお、本資料は、本学博物館実習室において、保管及び活用を図るものとする。



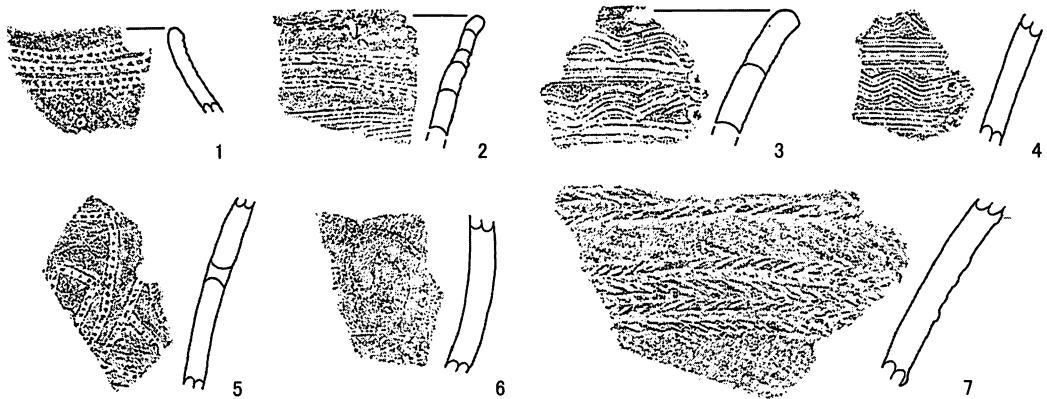
第7図 新井遺跡 遺物実測図 (1/3)



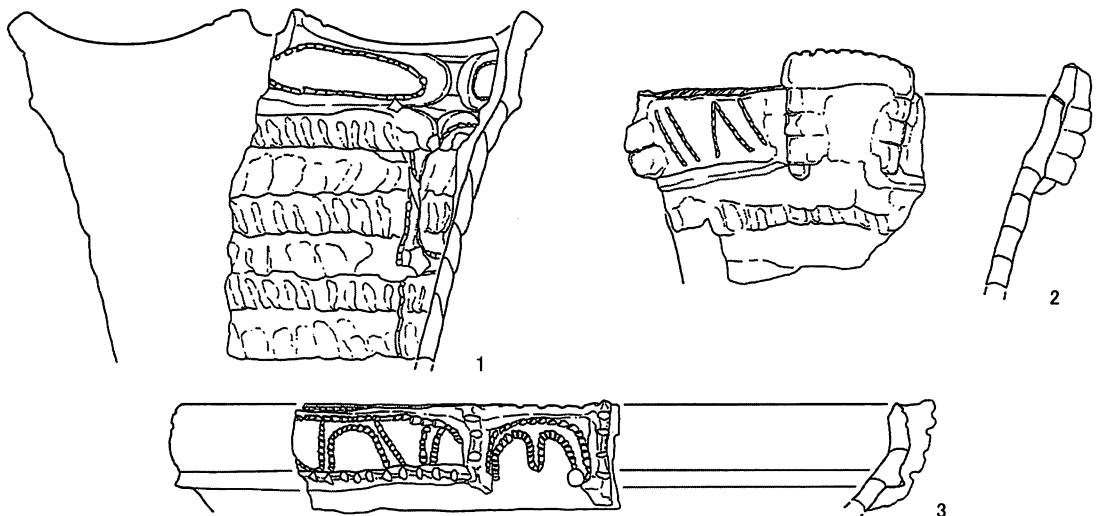
第8図 千歳遺跡 遺物実測図 (1/3)



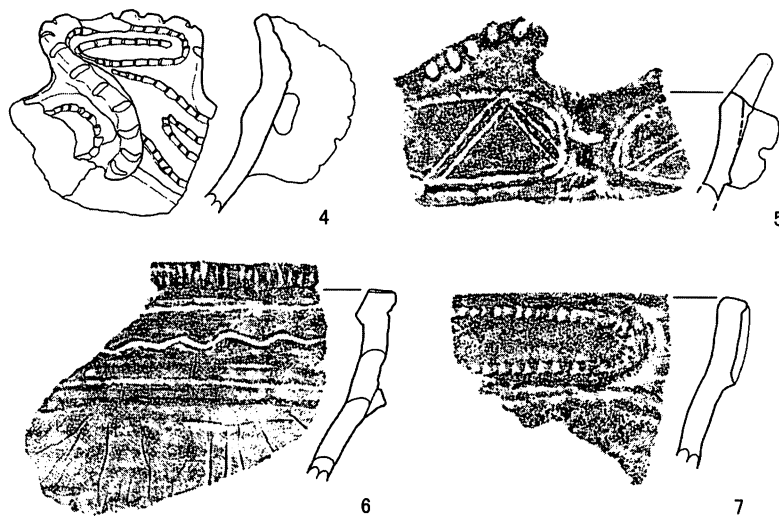
第9図 下組貝塚 遺物実測図 (1/3)



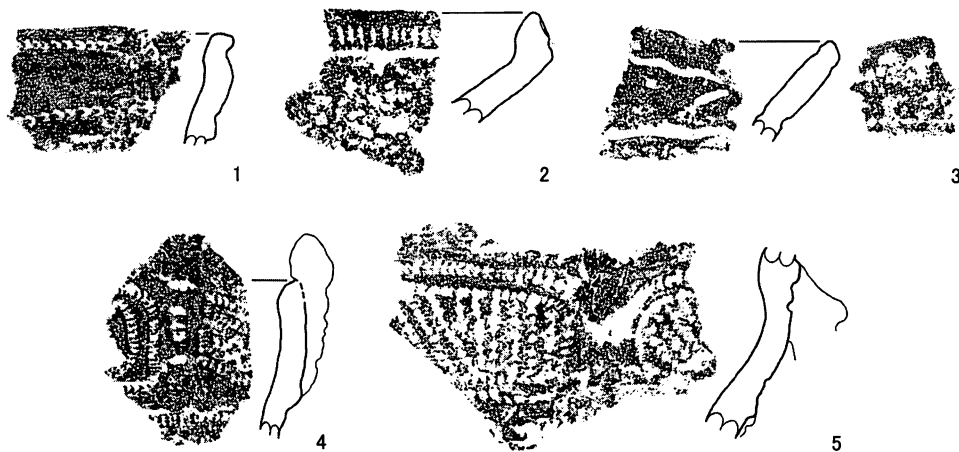
第10図 矢上谷戸貝塚 遺物実測図 (1/3)



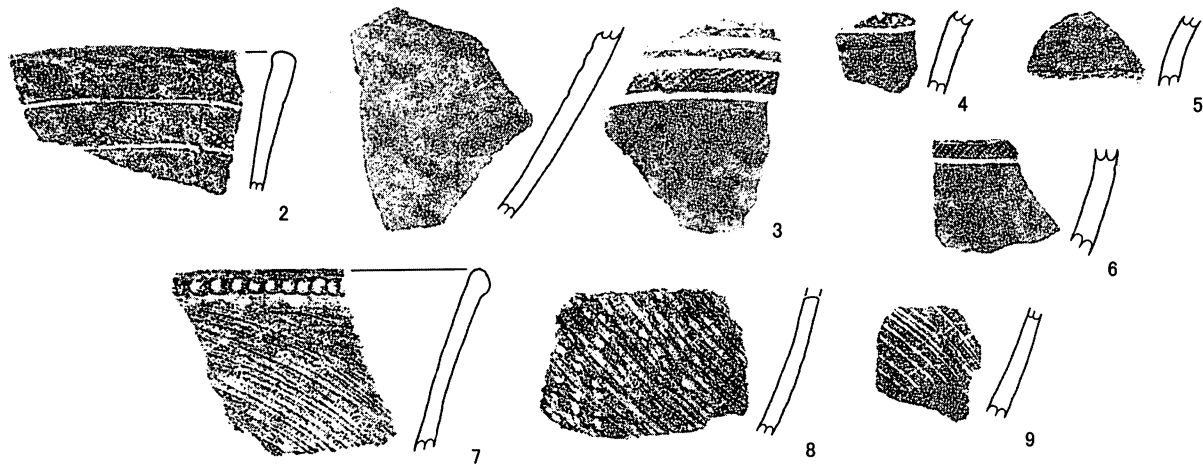
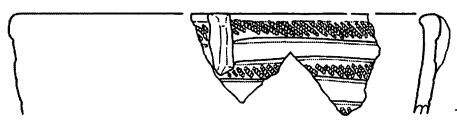
第11図 根田貝塚 遺物実測図① (1/4)



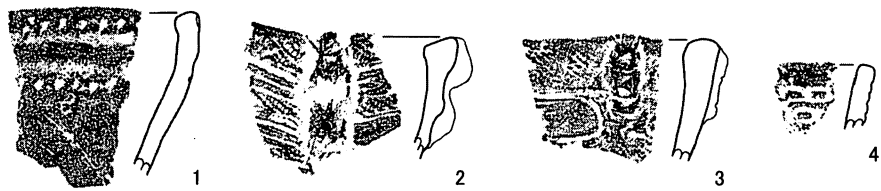
第12図 根田貝塚 遺物実測図② (1/3)



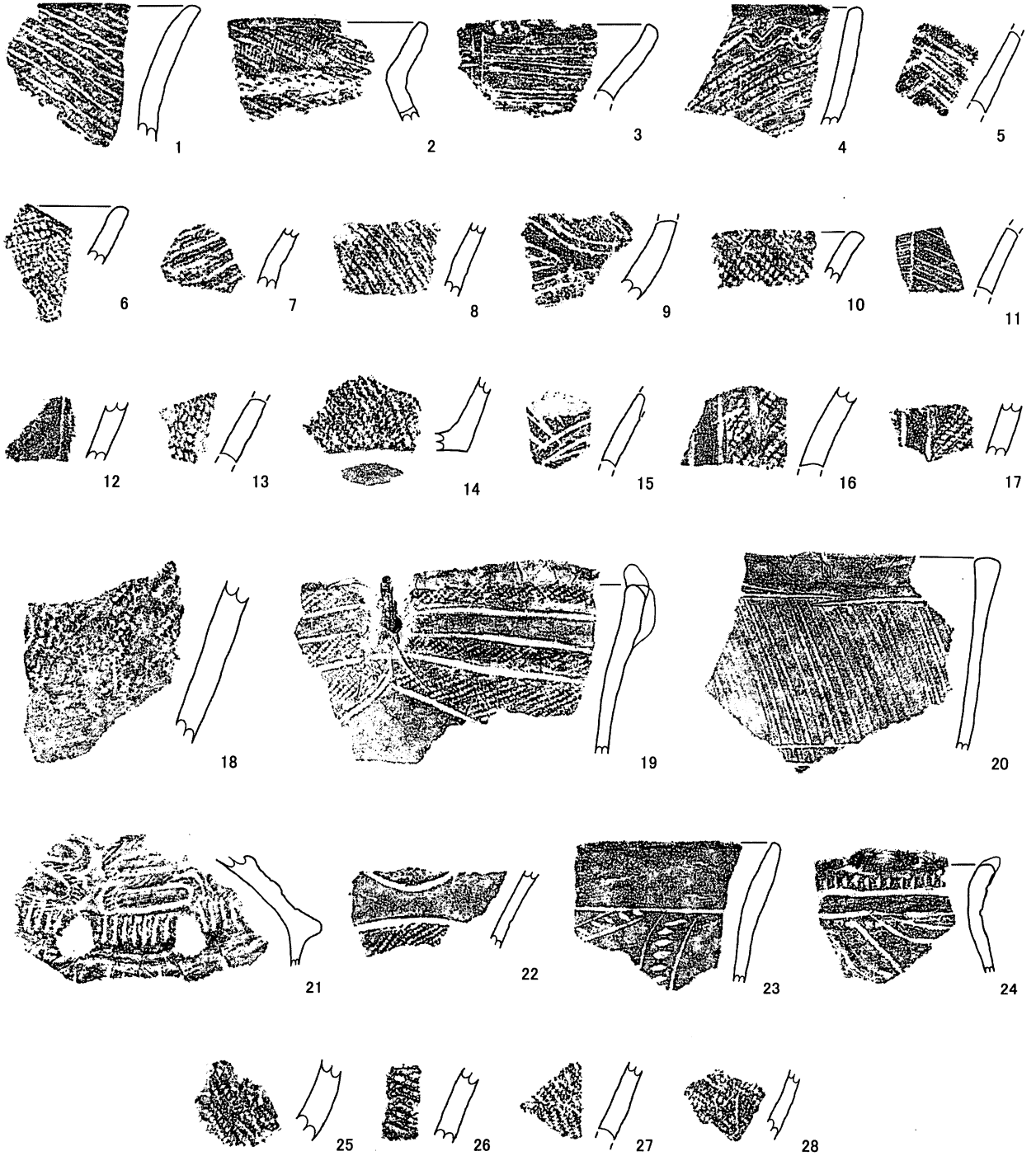
第13図 片平遺跡 遺物実測図① (1/3)



第14図 姥山貝塚 遺物実測図 (1/4,1/3)

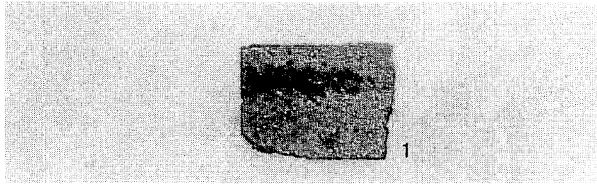


第15図 野津田原遺跡 遺物実測図 (1/3,1/1)

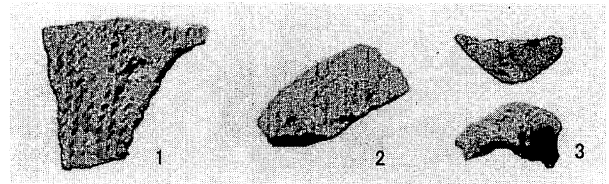


第16図 その他(採集地不明) 遺物実測図 (1/3)

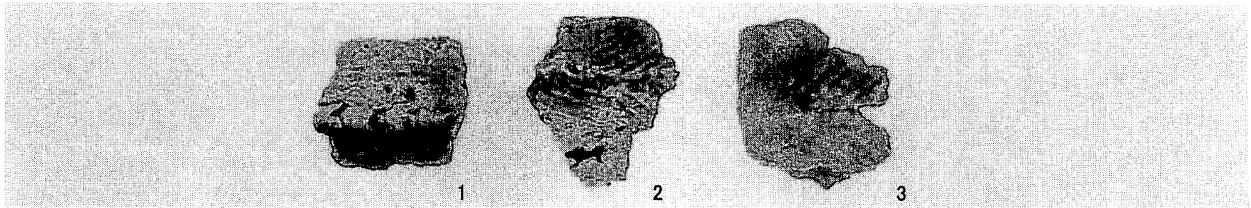
写真図版 1



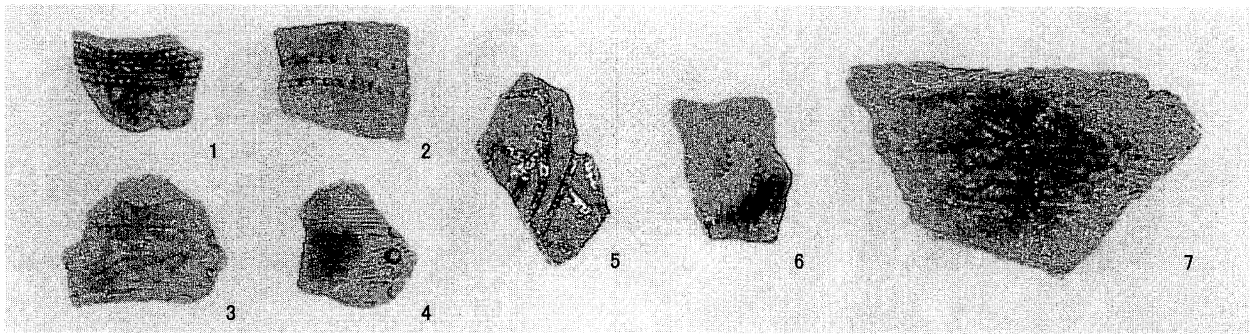
新井遺跡 (1/3)



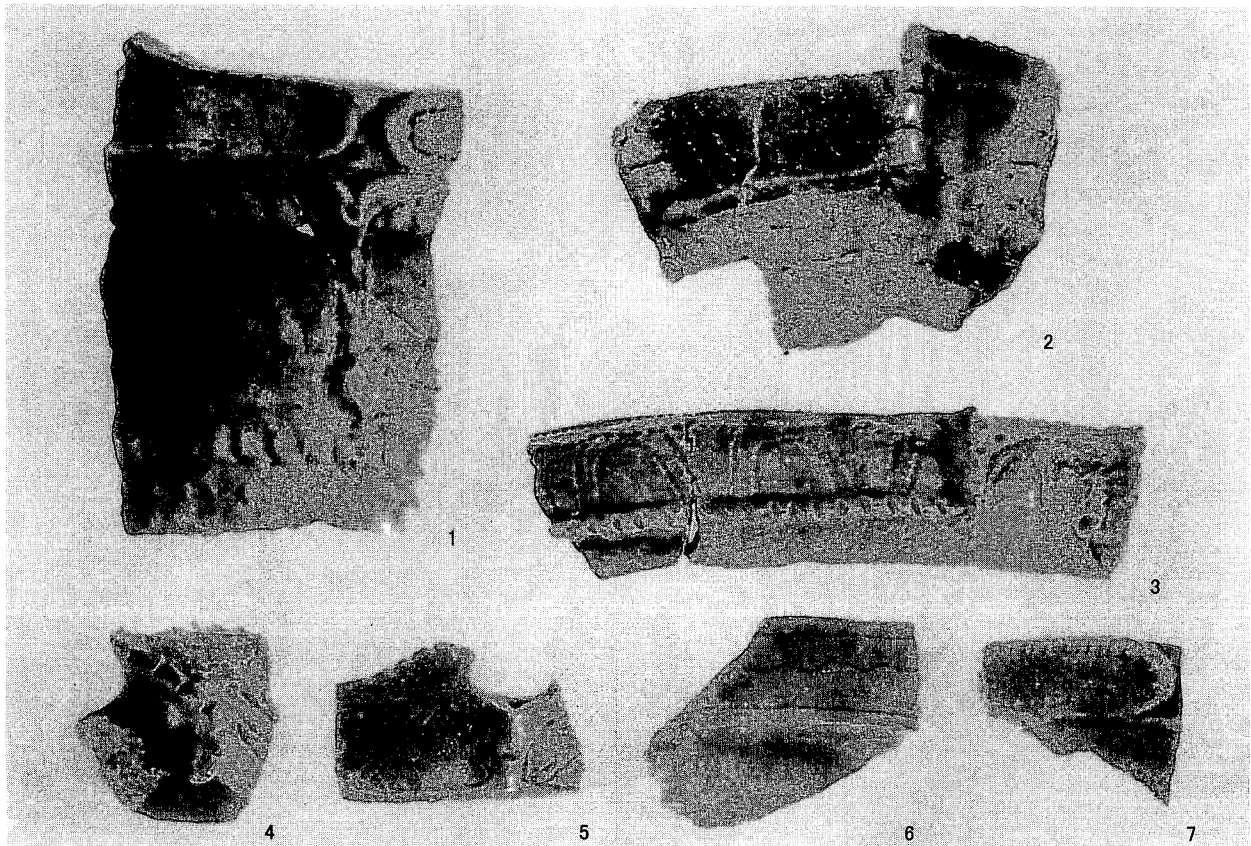
千歳遺跡 (1/3)



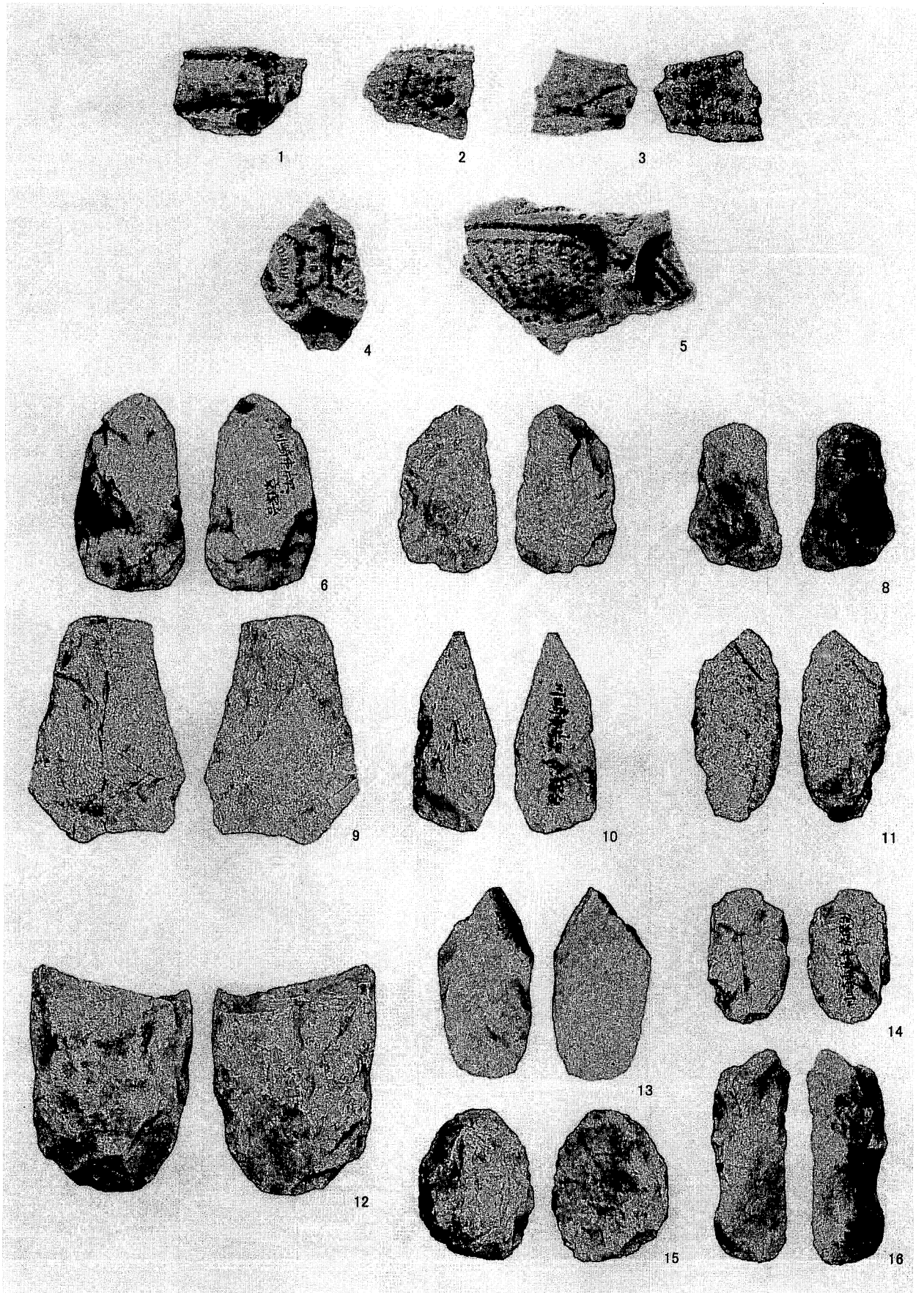
下組貝塚 (1/3)



矢上谷戸貝塚 (1/3)

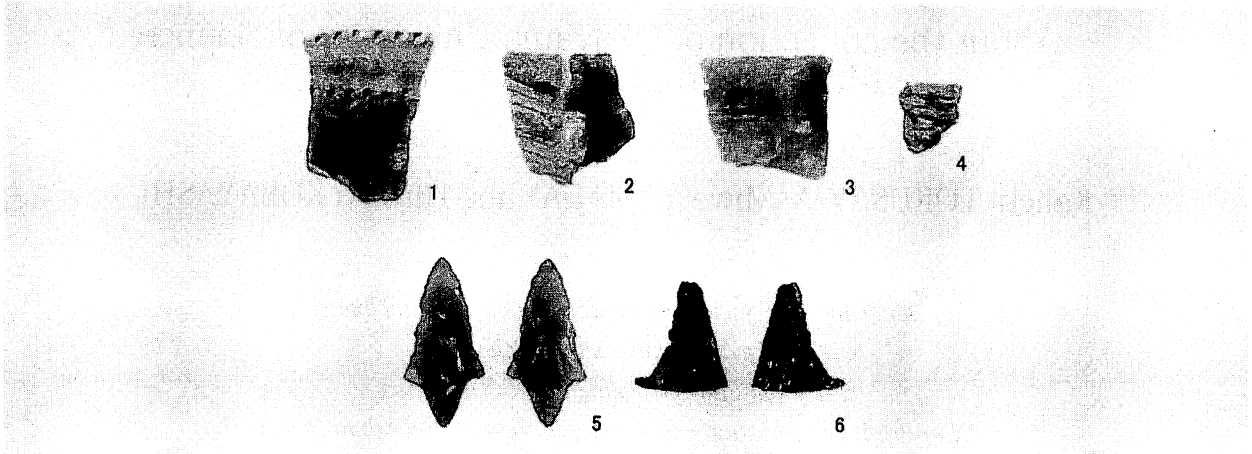


根田貝塚 (1/3)

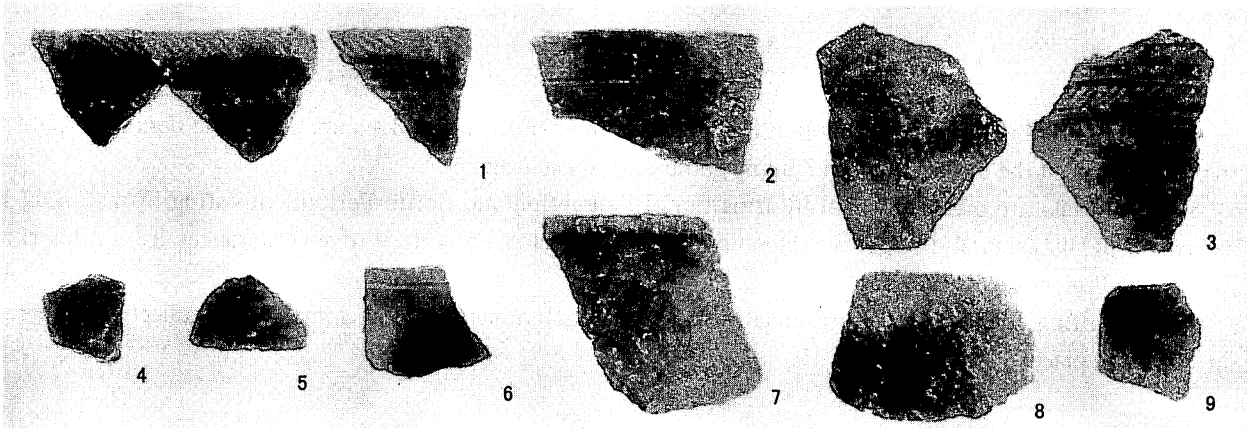


片平遺跡 (1/3)

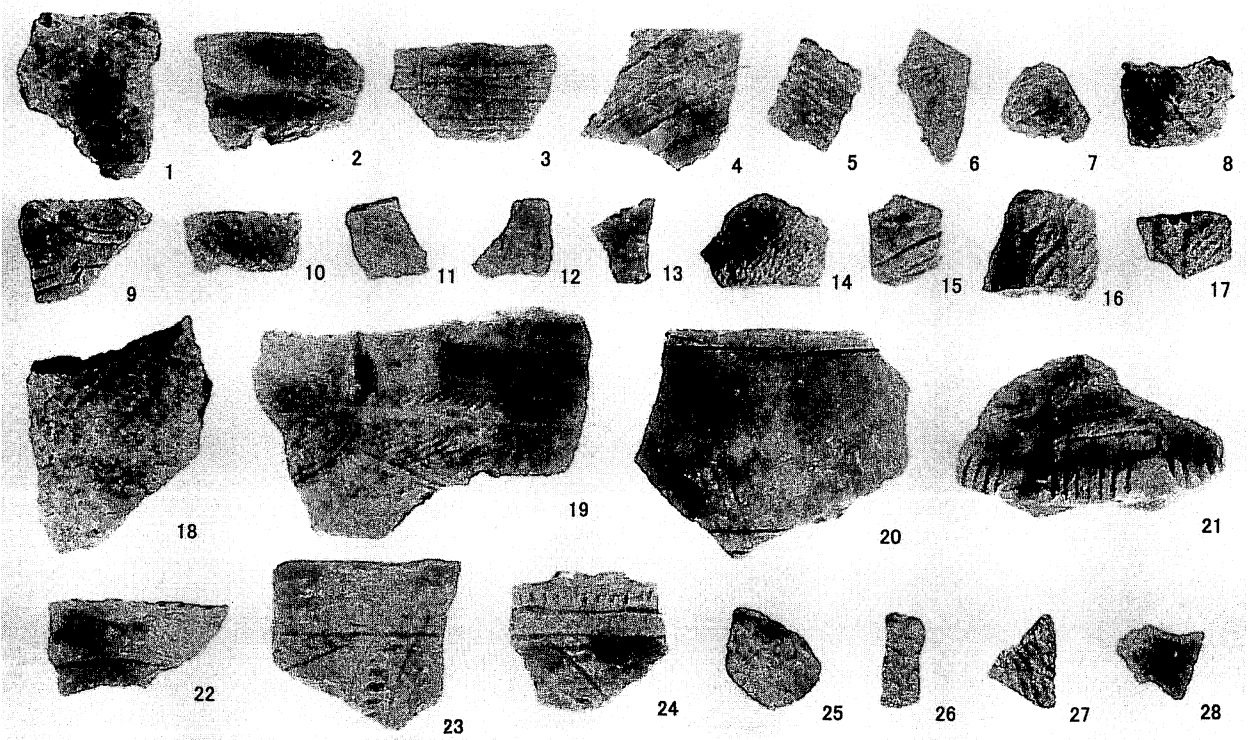
写真図版 3



野津田原遺跡 (1/3,1/1)



姥山貝塚 (1/3)



その他 (採集地不明) (1/3)

## Jomon Ware Donated by Hideko Kamaki

— About the collection of Okayama University of Science,  
Museum Attendant Program —

Keiichi TOKUSAWA, Miwa YAMADA\* and Hiroaki KOBAYASHI

*Department of Socio-Information, Faculty of Informatics*

*Okayama University of Science*

*1-1 Ridai-Cho, Okayama 700-0005, Japan*

*\*Non-Profit Organization History, Environment and Urban-Design*

*kamisoshigaya 2-38-27, Setagaya, Tokyo, Japan*

(Received September 30, 2005; accepted November 15, 2005)

On July 3, 2004, we received donation from Hideko Kamaki (living in Okayama City). She donated a part of the collection that the late Yoshimasa Kamaki gathered and excavated.

The materials are archaeological information of Paleolithic and Kofun Period, consisting of materials 1) excavated in Okayama and Kagawa prefectures and 2) collected on surface in several places from Aomori to Kagoshima Prefectures.

On this writing, I would like to introduce, among the donated materials, the Jomon Ware collection gathered on surface in places in Kanto region.